『人の心を知るお方』ヨハネ2:23-25

2:23 過越の祭の間、イエスがエルサレムに滞在しておられたとき、多くの人々は、その
行われたしるしを見て、イエスの名を信じた。
2:24 しかしイエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。それは、すべての人
を知っておられ、
2:25 また人についてあかしする者を、必要とされなかったからである。それは、ご自身
人の心の中にあることを知っておられたからである。

●序論
最近、SNSの中で「蛙化（かえるか）現象」というキーワード。
解説によると、「好きで好きで、おつきあいが始まったけれど、相手のちょっとした言葉や振る舞いで、一気に熱が冷めてしまい嫌悪感を抱いてしった」…というもの。
それは極端な例かもしれませんが、わたしたちも、しばしば自分自身の心の変化に戸惑うことはないでしょうか？　いつの間にか冷めてしまっている…。
それは信仰においてもそうです。
もしそんな自分の気持ちの変化、浮き沈みを、イエスさまが知っておられたとするなら、確かに　「:24 しかしイエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。」
という言葉にも納得がいくかもしれません。
　そして続く25節をリビングバイブルではこう訳していました。
　　（イエスさまは）人間がどれほど変わりやすいものかを知り尽くしておられたからです。

●本論
Ⅰ．しるしを示される方
　　2:23 過越の祭の間、イエスがエルサレムに滞在しておられたとき、多くの人々は、その行われたしるしを見て、イエスの名を信じた。

　祭りの間、エルサレムにとどまって、今度は「しるし」を人々の前でもあらわされたことがわかります。
　ここでわかるのは、そのしるしを見て、多くの人々はイエスさまを信じたということです。
　　ここで、この直後のイエスさまの言葉を聞き、また後に彼らもそして弟子たちもイエスさまから離れ去る姿を知っているので、ああ、とても不完全・不十分だと、後世の人たちに評価されることがあります。
　　確かに、キリストの本当の思いを知らず、まだ十字架と復活も知らない人たちです。
　　だから私たちが知っている福音の理解をもって彼らを測るならば、不十分だということも出来るかもしれません。

　でもその限られた情報や経験を通して、確かに彼らはイエスさまを信じたということは、幸いなことだと思います。救いの入口に立てた人たちでした。

不十分さを踏まえた上で聖書は、彼らが「イエスの名を信じた」とはっきり語ります。リビングバイブルでは、「『この方は確かにメシアだ』と信じるようになった」とあらわし、詳訳聖書では、「彼に従う者の群れに加わった」と説明を加えています。

この後、彼らがつまずくことも知っています。散らされることも知っています。それでもなお、その後の回復も視界においておられることを覚えて、この時の「信じた人々の幸い」をわたしは大切にしたいのです。

Ⅱ．自身をお任せにならない

2:24 しかしイエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。
新共同訳「しかし、イエスご自身は彼らを信用されなかった」。

最初に、人々の、そして私たちも不十分・不完全なことを気づくときがある者です。
イエスさまが、そのような私たちをご存じであるならば、わたしたちでも、そんなわたしたちを信用して…とは言えません。
このイエスさまが人々の手にご自分をまかせられた時があります。
それがあの十字架に至る道です。人々に捕らえられ、裁判の座に引き出され、鞭うたれ、そして十字架に磔にされた歩みです。
しかし、それは実際には、イエスさまにとって、人ではなく、父なる神さまに従い行く姿だったのです。

キリストは、わたしたちの父なる神の御旨に従い、わたしたちを今の悪の世から救い出そうとして、ご自身を罪のためにささげられたのである。（ガラテヤ1:4）

イエスさまは、その受難の時に、弟子たちがどのようにご自分をはなれていくかも、よくご存じでした。でもその将来を見る視界には、復活ののちに、彼らが回復されていくことも見ていたのです。
そんな弟子たちを慈しみの目で見守っていたイエスさまの様子を、のちにヨハネはこう記しています。

…イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを愛し通された。
（ヨハネ13:1）

イエスさまが、そこで信じた人々にご自分をお任せにならなかったこともすべて、その背景に真実な愛があったことを覚えていてください。

Ⅲ．すべての人の心を知っている

:24-25　…それは、すべての人を知っておられ、また人についてあかしする者を、必要とされなかったからである。それは、ご自身 人の心の中にあることを知っておられたからである。

数週間前、ナタナエルとイエスさまとの出会いの記事がありました。
　　ナタナエルは「どうしてわたしをご存じなのですか」と驚くほど。
　自分の事や思っていることを言い当てられる時には、たいがいは「怖い」という反応となります。
しかしナタナエルはここで違ったのです。
　”イエスさまにすべて知られている”いや「知っていただいている」という感動につながっていったのです。

　　本当の意味で『神を知る』とは、わたしの方が理解することではなく、”神がわたしを知っていてくださる”…という関係なのです。

さて私たちの場合、しばしば知っていてもらえてうれしい時もあるし、いやここでは目をつむって、知らないでいてください…と思うことあるのではないでしょうか。
　聖書ははっきり言います。「すべての人を知っておられる」「何が人間の心の中にあるかをよく知っておられる(新共同訳)」と。

主は良いお方です。そして、わたしたちを愛してくださっています。
　しばしば、自分の中にある後ろめたさや、弱さや認めたくないような過ちを抱えているとき、本当なら素直に神さまに目を向き直って、癒していただけばいいのですが、その反対の行動に向かせる、それが罪の力です。
　　アダムとエバも、そうして神から身を隠したことを思い出して下さい。

神さまは、わたしを、そして私の心の中も知っていてくださる。弱さも欠けも足りなさも、醜さもすべて全て知っていてくださる。それは、誰がどうごまかそうとも確かな事実なのです。
　実はそれこそ、クリスチャンの安心となるのです。神さまに知っていただいて、癒していただいて、また導いていただく。
　　そうして、私たちは、すべてを信頼して、お任せすることができる。ゆだねていくことができるからです。

最後に）
　人はだれも、イエスさまの目から見て十分な人はいません。

昔 観た映画、完璧を求める人工知能が、不完全な人間を排除していく…。
　-もし完璧な方が、相手にも完璧を求めるなら。
　-もし神さまが、わたしたちに完璧を求められるならば、わたしたちはそれにこたえることはできません。
　-もし、自分が完璧だと自負している人が、その目に不十分な人に完璧を求めようとするならば、そこには大きな軋轢が生まれてしまいます。

はたして、ひとり子イエス・キリストをお遣わしになった神さまが、そのように私たち

に迫られているのでしょうか？
そうではなく、イエス・キリストは不十分な私たちに、「わたしのもとに来なさい。わたしがあなたを赦し、あなたを愛の内に祝福しよう」と語ってくださるお方なのです。

マルコ2:17「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

有名な賛美「アメイジング・グレース」は、かつて奴隷商人であったジョン・ニュートンという牧師が、その経験から生み出した賛美です。
彼は、数々の悪いことを重ねてきました。けれどもそれ以上に神さまは、数々の出来事や奇蹟を通して、彼に数々の気づきと悔い改めをする機会を与えておられました。でも、それでも彼は、極端に言うならば、罪のどん底のどん底まで行きついていたのです。彼の伝記にはこうあります。

このように、神さまは救いの手をたびたび差し出していましたが、ジョン・ニュートンは、そのありがたさを感じる心を失っていました。それどころか、ますます神さまの恵みを受けつけなくなっていました。そのうち良心のかけらもなくなり、自分の行いがどのような結果をもたらすことになるか、まったく考えなくなっていたのです。

それでも神さまは、彼をあきらめなかった。そして彼は救われた。その経験があの賛美となってあらわされているのです。
１．おどろくばかりの　恵みなりき　この身のけがれを知れるわれに
そして彼の変えられた心は、神さまに向きなおって行ったのです。
２．恵みは　わが身の恐れを消し　（神に）任する　心を起こさせたり

すべては、神さまが彼を知っていてくださったからです。そして愛によって触れ続けていてくださったからです。
そしてその背後に、わずか６歳の時に天に召された母の祈りと聖書の教えがあったからです。

覚えていてください。私たちは知っていただいており、また愛されており、そしてイエスさまのもとにあります。そんな私たちのために、今年掲げられているテーマは、わたしたちにとって命となり成長となることを忘れないでいてほしいのです。
ヨハネ15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。